

牡丹江からハルビンへ長春へ、長い道のりをたどって探してくれた夫は、かわいがった長女の死に目に間に合いい、その手で葬った。「幸運」の二文字だけでは片付けられぬ幸せ、必死になって生き延びえたのも、夫の支えがあったのではなかったかと強く思う。さらに、収容所で団結した月日も加えて。

帰郷後の再建の一つに長男を生かさうと努めたことを書き添える。異国で苦勞を共にしたわが子（帰国一団で最低年齢）は、私達には掛け替えの無い一人っ子なのであった。

惨たんたる大陸の終焉

山形県 阿部 恵 一

海外移住の動機と家族の状況

海外への勇飛。当時の疲弊しかった東北の農山村に住む子弟にとっては、国策にそった開かれた道であった。

その頃、在満の工鉱業系の大企業が投資して満州の工鉱

業現場における中堅技術者を養成する学校が酒田市にもあった。

その三年間の教育を経た私は昭和十八年三月勇躍渡満。四平街の陸軍燃料廠に就職した。母は既にその街に移住しておった。（妹は内地の高等女学校に在学中、昭和二十年四月渡満）

終戦前後と、在外財産と、心身すら喪失した生活の激変。

昭和二十年八月九日、早曉、ソ連軍が、ソ満国境の各方面から怒濤のように満州へ侵攻してきて未曾有の大混乱に陥った。

その前、八月一日、私は現役の初年兵として、そのまま四平陸軍燃料廠に航技二等兵として入隊しておった。八月十五日の終戦の詔勅のラジオ放送は全員部隊の広場に呼集されて聞いた。

盟邦ドイツから輸入した航空燃料の製造設備の接収を恐れた部隊は私達十人の初年兵に白無垢の上衣を着せて施設破壊の決死隊員とさせた。それは不発に終わった。

母と別れの水盃を汲みかわしたことは、今なお鮮明

だ。陸軍は、その殆んどが軍属と、大学出の技術將校群により編成されておったが、その將兵だけが丘の上の揚木林の戦軍隊跡の兵舎に、ソ連兵の監視のもとに収容された。兵舎から僅かの所を連京線の鉄道が走っており毎日、南下する客貨車の通過を見たがあわれな敗戦の犠牲となつた人々の惨状を見せつけられた。麻袋を腰に巻いたままあふれた客車の屋根に伏して去る婦女子の姿は見るに忍びなかった。辺境に取り残された開拓団の家族が多いと聞いた。

敗戦によつてすべての日本人が各々の場所、立場によつて、それぞれの苦難をうけた。しかし、屈辱と絶えまない戦慄の、どん底の苦境におちた満州引揚者の場合は筆舌ではつくしえない想像を絶するものがあつた。単なる戦争犠牲者とは異質のものである。

わずか二週間の軍隊生活にすぎなかつた若輩の私は駆り立てられながら新京、ハルビン、北安と北滿を經由しながら、ついにシベリヤの凍土を踏まなければならなかつた。

四平街に残された母と妹は防護される立場を失い、そ

してソ連軍の侵攻と、さらに共産八路军と国府軍の内戦の戦火におののきながら身のちぢむ思いで過ごしたといふ。

引揚げ、引揚げ後の生活、並びに生活安定までの苦勞。

人生の再起をかけて満州に渡り辛苦の甲斐なく、すべての財産をなげて着のみのままに、リュック一つを背負つた母と妹は翌二十一年七月に山形に歸つた。しかし戦後の疲弊の中で受入れの余裕を失つた母の実家からは同居を断られた。つぎに祖父の実家に居候の立場で引揚げ親子は身を寄せた。

旧陸軍の兵舎を改造した隣の世帯とは薄板一枚の引揚者寮での肩身の狭い生活もあつた。昭和二十七年、当時国民健康保健の創設で人手を求めておつた町役場に就職した。それまでの苦節六年間は転々として衣食のために耐えた。

地方公務員として三十五年勤めて、ようやく定年となつた今、あの大陸への勇飛、敗戦による苦難の連続、今なお回想される。